親子関係の心理学的研究(第8報告)*

—子供に対する親の態度の因子分析的研究—

大阪市立大学

中 西 昇**

I 問 題

子供に対して親の用意する状況が子供の人格形成にいかなる影響を及ぼすかという意味で行なわれる親子関係の研究においては、親の用意する状況と子供の人格特性との2つの変数を客観的に取り出し、叙述することが必要な手続きである。本研究はこの手続き上のひとつの吟味であり、親の子供に対する態度を叙述するための手続を問題とする。

親の子供に対する態度を取り出すために、従来、質問紙法、面接質問法、あるいは行動観察法などが採られているが、質問あるいは行動観察によつて研究者たちがとらえようとしている行動あるいは態度特性は、研究者によつてかなりまちまちであり様とはいえない。(これは子供の行動測定においても同様である。)

質問または観察の具体的項目を決定するとき、多くの研究者においては、自己の観念的に設定した行動または態度特性に関連した概念的範疇があらかじめ存在し、その範疇に妥当する行動(態度)の頻度あるいは強度のなんらかの尺度値が親の態度の客観的指数として用いられている。

この範疇は研究者のいまだく仮説的理論に裏づけられているとはいえず、結局は任意な概念の枠組にもとづくために、等しく子供の人格特性に影響する親の態度として取り上げられていながら、研究者によつてかなりの相違があるといえる。

たとえば、Symonds, P. M. (1939) (12)は従来の文献を調査し、特に重要な態度範疇として、受容(acceptance)——拒否(rejection)と支配(dominance)——服従(submission)の2つの連続(continua)を取り上げ、これはその後、Itkin, W. (1952) (5), Porter, B. M. (1954) (8)

らによつて用いられわが国においてもしばしば採用されているが、Baldwin, A. L. (1948) (2)は民主的(democratic)——抑制的(control)と家庭の活動水準(activity level)を、また、Baldwin, A. L. (1949) (3)は暖かさ(warmth)民主性(democracy)、甘やかし(indulgence)の3因子を用いている。またLasko, J. K. (1954) (6)は暖かさ(warmth)、抑制(control)、不安(anxiety)の3因子を、Ausubel, D. P. (1954) (1)は受容(acceptance)——拒否(rejection)、内よりの評価(intrinsic valuation)——外よりの評価(extrinsic valuation)の2連続を用いる。Shaeffer, E. S. と Bell, R. Q. (1957) (11)は言語的奨励(encouragement of verbalization)、家政への嫌悪(hostile rejection of homemaking role)、仕事への過大欲求(excessive demand for striving)、所有過大(overpossessiveness)、ひどい罰(harsh punitive control)の5範疇をあげており、まだこの他後述するFPBSあるいはRadke, M. J. (1946) (9)は異なつた態度の範疇を叙述しており、研究者にとつてまちまちであり、また子供の行動特性に影響する因子として親の態度といえないものを含むものも多い。

以上のような範疇はそれぞれいくつかの質問または観察の項目をふくむ。すなわちこれらの範疇はそれぞれいくつかの現象的行動細目によつて操作的に裏づけされているのである。したがつて同一の範疇名を用いていても、その操作的裏づけとなる質問または観察項目は必ずしも等しいわけではなく、そのばあい同一の範疇名であつても操作的には異なる内容をもつというべきであり、逆に異なつた範疇名を用いていても等しい項目に裏づけされていれば、等しい内容をもつことになる。

もちろんこのさい重要なのは範疇の名辞ではなく観察または質問の項目である。この項目に妥当すると判定された行動または態度を取り上げるのであるが、いかなる項目が一定の範疇を裏づけるかは、範疇設定のばあいと同様に、研究者の仮説的枠組にもとづくのであり、恣意的といふことができる。

* Psychological study of the parent-child relationship. (8) —A factor analytic study of the parental attitudes—

** by Nakanishi, Noboru (Osaka City University)

このために項目叙述に用いられる用語が文章上異なつていても、同一の行動を取り上げるばあいもあれば、必要な項目を脱逸することも起こりうる。ひいてはこれらの項目によつて裏づけられる範疇が必ずしもその名辭に即した内容をもつとはいへなくなる。

このような項目や範疇の混乱を整理するひとつの方法として因子分析がある。親子関係の研究にしばしば用いられる FPBS は創始者 Champney (1941)⁽⁴⁾によつて 1. 自由 (freedom) —— 専断的抑制 (arbitrary control) 2. 刺激 (stimulation) —— 無視 (neglect) 3. 赤ちゃん扱い (babying) —— 大人扱い (adulting) 4. 悪適応 (maladjusted) —— 良適応 (well-adjusted), 5. 是認 (approving) —— 非認 (deprecating) 6. 合理的 (rational) —— 不合理 (non-rational) 7. 訓練 (training) —— 自由成長 (free-growth) 8. 社会的 (socialized) —— 個人的 (individualized) の 8 範疇に分けられたが、これに因子分析を行なつた Roff, M. (1949)⁽¹⁰⁾によれば、1. 子供への関心 (concern for child) 2. 民主的指導 (democratic guidance) 3. 許容性 (permissiveness) 4. 親子間調和 (parent-child harmony) 5. 親の社交性 (sociability—adjustment of parents) 6. 家庭の活動性 (activeness of home) 7. 家庭の無用意 (non-readiness of home) の 7 範疇になつており、概念的に設定した範疇とそれを裏づける項目が操作的に必ずしも適当ではないことを証明している。

われわれはさきに Radke にならつて作成した項目を用い母親の子に対する態度を面接質問により取り出し、Radke にならつた分類を行ない、それと子供の行動特性との関係につき研究発表した⁽⁷⁾が、その分類は概念的な範疇によるものであつた。そのさい得た資料に因子分析を施し、それによつて項目の整理ならびに範疇を検討するための手がかりを得ようとするのが本研究の目的である。

II 方法と手続き

因子分析の資料としてさきにわれわれが大阪市内の 1 幼稚園 2 保育所の 1 年保育児の母親にたいして行なつた面接質問の結果を用いる。そのうち自己の子供に対する態度に関する項目は 57 個であり⁽⁷⁾ p. 218 f 参照、項目番号 71 より 127 まで) 母親の態度は強度または頻度に応じ 4 段階に品等される。採点は面接者が行なつた。(2 名の面接担当者が一部の同一の母親にそれぞれ独立に採点した一致度は 80—90% であり信頼度ありと認められる)

母親は 80 名、家庭の職業は大部分は中小商工業、家内工業、下級官公吏などであり、社会経済階層は中流の下

より下流に属するものと思われる。

面接質問担当はいずれも本学児童心理学研究室員である。(この面接の結果ならびにそれによる親の態度と子供の行動特性との関係は⁽⁷⁾を参照されたい)

子供に対する親の態度に関する上記の資料により、各項目間の相関 (c) を求め、ついでセントロイド法により因子分析を行ない、直交回転を重ねて因子構造を明らかにする。

III 結 果

以上の手続きによつて得られた各項目間の相関を因子分析した結果、各項目のもつセントロイド因子負荷量、ならびに回転直交因子負荷量は Table 1 のとおりである。^{*}

因子の解釈

第 1 因子

第 1 因子で回転直交因子負荷量の高い項目は、私 (母親) は上品でませた子供を好む (負荷量 .62), いつも身ぎれいにするようにいう (.58), よくいうことをきくように望んでいる (.53), 私は静かな子どもが好きだ (.51), この子は母親のいうことをきかない (.51), いうことをきかぬとき巡査や神罰で脅かす (.51) などであり、負荷量の小さい項目は、私は子供と遊ぶ (.51); 子供は母親のいうことをきく (.23), 私は大人に好かれるよりも子供に人気のある子供の方が好きだ (.24), 私は子供が友人を家に連れてくるのを好む (.26), この子供は自分の感じたことや考えを母親にうちあける (.26) などである。

これにより第 1 因子の一方の極は子供を扱い難いものと感じ、脅かしていることをきかせ、また静かなませたよくいうことをきくものとする。すなわち子供は手におえないものであり脅かしてしつけられるべきものとする母親の態度であり、他方の極は、子供と遊び、子供を仲間と感じ、その友人を歓迎する。子供も自己の感じを卒直にうちあけるものとする態度であり、子供を仲間として自己と同じ高みにおいて扱う態度である。したがって權威的——民主的因子と名づけることができる。

Roff が FPBS を因子分析して見出した第 2 因子 democratic guidance の因子に應ずるものと考えられる。

第 2 因子

第 2 因子の負荷量の高い項目は、この子供は家庭内の他の子供を嫉んでいる (.80), 家庭内の他の子供はこの子供を嫉んでいる (.50), この子供は兄弟姉妹とけんかする (.45), この子供は母親を恐れている (.42) などである。

^{*} 相関係数マトリックスは紙面の制限上割愛した。これについては著者に直接問い合せていただきたい。

Table 1

項目 番号	セントロイド因子負荷量					回転直交因子負荷量				
	1	2	3	4	h ²	1	2	3	4	h ²
71	.63	.25	.68	.22	.98	.15	.36	.85	.34	.99
2	.57	.24	.18	-.08	.40	.42	.30	.36	.14	.42
3	.62	.16	.33	.20	.52	.28	.43	.30	.38	.50
4	.52	.19	-.07	-.04	.32	.42	.28	.11	.19	.30
5	.56	.21	-.05	0	.36	.44	.30	.14	.24	.36
6	.70	.05	.44	.17	.72	.33	.17	.66	.38	.72
7	.58	.25	.28	.19	.51	.26	.35	.46	.36	.53
8	.55	.12	-.03	.03	.32	.43	.21	.16	.27	.32
9	.67	.08	.36	.21	.63	.33	.19	.57	.42	.65
80	.68	.15	0	.04	.49	.51	.26	.24	.33	.49
1	.65	-.11	.19	.17	.50	.40	0	.42	.42	.51
2	.68	.34	.03	.16	.58	.46	.45	.25	.32	.58
3	.60	.40	.01	.05	.52	.40	.50	.20	.28	.53
4	.65	.70	0	.04	.92	.40	.80	.19	.27	.91
85	.62	-.05	.22	.17	.46	.36	.05	.43	.40	.48
6	.63	.24	.06	.08	.46	.42	.35	.27	.33	.48
7	.63	.02	.25	.21	.50	.34	.13	.46	.43	.53
8	.68	.13	.01	.08	.49	.49	.24	.25	.37	.50
9	.62	.15	-.06	.24	.47	.36	.25	.16	.48	.45
90	.54	.27	-.19	.07	.41	.43	.36	0	.32	.42
1	.57	.13	-.02	.03	.34	.43	.23	.18	.27	.34
2	.60	.31	-.07	.03	.46	.46	.41	.13	.29	.48
3	.70	.14	.08	.07	.53	.50	.26	.32	.36	.55
4	.62	.20	.20	.06	.47	.38	.30	.40	.28	.47
95	.60	-.01	-.01	-.10	.37	.49	.09	.23	.29	.39
6	.58	.21	.21	.30	.51	.23	.31	.39	.47	.52
7	.64	.08	.24	.21	.52	.34	.19	.45	.43	.53
8	.66	.17	.46	.10	.68	.32	.28	.65	.29	.69
9	.64	-.05	.23	.09	.47	.39	.06	.44	.31	.45
100	.66	.05	.29	.11	.54	.38	.16	.51	.34	.55
1	.59	.29	.09	-.02	.44	.42	.39	.28	.21	.45
2	.67	.23	.16	.10	.53	.41	.34	.38	.34	.54
3	.64	.10	-.09	.05	.43	.51	.21	.14	.34	.44
4	.60	.13	.12	-.08	.40	.40	.23	.32	.25	.38
105	.65	-.04	.16	.25	.51	.37	.07	.39	.49	.53
6	.70	.15	.14	.25	.60	.38	.27	.37	.41	.59
7	.66	.10	.25	.13	.53	.38	.21	.46	.36	.53
8	.73	-.09	.17	.03	.57	.53	.03	.42	.33	.57
9	.61	.32	-.10	.01	.48	.48	.42	.11	.28	.50
110	.72	-.09	.15	.09	.56	.49	.03	.40	.37	.54
1	.66	.10	.31	.11	.55	.37	.21	.52	.33	.56
2	.69	0	.25	.27	.61	.34	.12	.48	.50	.61
3	.75	0	.12	.17	.61	.49	.13	.38	.46	.60
4	.69	.08	.13	-.16	.53	.58	.20	.37	.14	.53
115	.63	.28	-.08	.03	.48	.41	.39	.14	.38	.48
6	.63	.11	.02	-.05	.41	.53	.22	.20	.24	.43
7	.66	0	.35	.18	.58	.27	.11	.57	.37	.56
8	.59	-.04	.29	.72	.95	.44	.06	.48	.85	.96
9	.65	.05	.54	.19	.75	.26	.16	.73	.35	.75
120	.57	-.05	.05	.37	.47	.27	.05	.26	.58	.48
1	.43	-.02	.09	-.12	.20	.33	.05	.24	.08	.18
2	.76	.17	.13	.31	.46	.24	.26	.31	.49	.46
3	.65	.16	.14	.25	.53	.34	.27	.35	.48	.54
4	.60	.02	.04	-.30	.45	.62	.12	.25	0	.46
125	.58	.13	.12	-.20	.41	.51	.23	.31	.06	.41
6	.69	.19	.23	.34	.68	.30	.31	.45	.55	.69
7	.65	.07	.17	.33	.57	.31	.18	.39	.55	.58

あり、負荷量の小さい項目は、この子供は兄弟姉妹の間で人気がある(.00)、私は子供のことについてのんきだ(.03)、子供は母親のいうことなどきかないで思いどおりのことをする(.03)、などである。

これにより第2因子の一方の極は、同胞間の不和、あるいは不和を生ずるような母親の態度である。子供が母親に恐れを感じていることを母親が自認しているが、これが同胞不和とひとつの群を作ることは、母親の脅威的態度が子供の間での不和の原因であることを想像させる。

他方の極は家庭内の子供の間の調和であり、あるいは子供に対するのんきな態度がこれと結びつき、自由な取扱いが同胞間の調和の原因となるとも考えられる。

命名するなれば同胞間不調和一調和の因子である。

第3因子

第3因子の負荷量の大きな項目は、私は子供と遊ぶ(.85)、子供は自分の感じたことや考えを母親にうちあける(.73)、子供が私のいうことをきかないとき私は子供に負ける(.66)、子供は家庭の相談事に加わる(.57)、私は子供を叱る前にその理由をいう(.57)、などである。

負荷量の小さい項目は、私は子供を叱るとき押入、土蔵などに閉じこめる(.00)、子供は母親を恐れている(.11)、子供がいうことをきかぬと私は巡査や神罰で脅かす(.14)、子供は父親を恐れている(.14)、などである。

一方の極は、子供が母親に自己の意志をよく伝え、大人の相談事に入ることが許されるような、母親の許容的態度であり、他方の極は、親を恐れるようなきびしい罰を与える態度を示すものと考えられる。したがって本因子は、許容的——非許容的因子とすることができる。Roff のいう permissiveness に応ずるであろう。

第4因子

第4因子の負荷量の大きな項目は、私は子供に愛情を示す(.85)、私は子供を赤ん坊扱いする(.58)、私は子供の行いに満足している(.55)、私は小心よりも大胆な子供を好む(.55)などである。

負荷量の小さい項目は、私はおてんばやごんた(いたずら)な子供より上品なおませさんの方を好む(.00)、私はおしやべりよりも静かな子供の方を好む(.06)、私は反抗的な子供よりも従順な子供の方を好む(.08)、私は子供にいつも身ぎれいにするようにいつている(.14)などである。

一方の極には子供つばいあり方を好むとともに、いつまでも子供扱いする態度があり、他方の極には、子供に上品や従順さを求め、大人らしいあり方を期待し奨励する態度がある。

したがって、子供らしさ——大人らしさの奨励の因子

であるといえよう。

各因子間の相関

以上の4因子の相互独立の程度を調べるために相関(r)を求めた。Table 2がそれである。

Table 2

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子	—	-.020	-.397**	-.372**
第2因子		—	-.346*	-.257
第3因子			—	.160
第4因子				—

* は $p < .05$ ** は $p < .01$ で有意

これによれば第1因子と第3因子、第1因子と第4因子との間、また第2因子と第3因子との間にはいずれも有意な逆相関が成立する。その他の因子間には関係が見出されない。

第1因子の低い負荷量の民主的態度が、第3因子の高い負荷の許容的態度あるいは、第4因子の高い負荷の子供らしさの奨励の態度とが関係することは、一応この3因子に共通したさらに高次の因子、たとえば子供に対して理解のある態度のようなものを暗示させるが、第3因子と第4因子との間には有意の相関がみられない。したがって第1因子と第3因子とが相おおう領域は、第1因子と第4因子とが相おおう領域とは別個のものとする方がよい。

第2因子と第3因子との逆相関については、第2因子の低い負荷は同胞の調和を示し、第3因子の高い負荷は許容的態度を示すものであるために、親の許容的態度と同胞間調和とが正の関係をもつことになる。この関係は当然考えられるところであるが、第2因子も他の因子と関係をもたないために、この両因子が相おおう領域は、他と無関係といわなければならない。

IV 考 察

1) 因子分析の結果 1.権威的——民主的 2.同胞間不調和——調和 3.許容的——非許容的 4.子供らしさ——大人らしさの奨励 の4因子を見出した。これを原項目を設定した Radke の概念的範疇と比較すれば、Radke は 1.民主的——専制的 2.拘束の厳——寛 3.罰の厳——寛 4.親子間の親疎関係良——不良 5.子供のしつけにおける父母の責任の平等——不平等 6.同胞間の調和——不調和の6範疇を立てている。まず範疇の数が異なり、その名辞も必ずしもすべてが一致するとはいえないことが明らかである。さらに進めた比較のため

に、同一の名辞を用いた Radke の第 6 と本研究の第 2 因子とを比較すれば、Radke に含まれる項目番号は 81 82 83 84 の 4 個、本研究では 81 82 83 84 92 108 109 110 の 8 個であり、同一名辞であつてもその裏づけとなる項目が異なる。ほとんど同様と考えられる範疇名を用いる Radke の第 1 と本研究の第 1 因子を比較すれば、Radke では 75 79 116 117 の 4 項目、本研究では 71 77 96 103 108 114 116 119 122 124 125 番の諸項目であり、まったく一致するものがない。すなわち、Radke が民主——専制の系列とする項目と本研究において権威的——民主的とする因子を含む項目とはまったく異なるために、範疇名は同様であっても内容的操作的に指示するところはまったく別のものといふことができる。

もちろん、このような不一致は調査の対象が異なることにもとづくとも考えられるが、概念的に設定された範疇やその裏づけとなる項目が設定者の意図するところとかけ離れる可能性は明らかといえるであろう。

2) 子供に対する親の態度に関して因子分析研究を Roff⁽¹⁰⁾ が行なっている。Roff の資料は FPBS を用いて得られたものであるために、直接に本研究と比較することはできない。FPBS の質問項目ならびに採点法は本研究のそれとはひどく異なるからである。しかし FPBS も Radke's scale もともに子供に対する親の態度を測定しようとするものであり、項目の内容や数は同一ではないとはいえ、そのめざす実体は同一と考えられ、またそのために両スケールの設定に当たつての仮設的枠組がそれほど異なるものとも思われなない。この理由により Roff の結果と本研究の結果を比較することは有意義であり、また本研究の結果の妥当性を検証するひとつの手がかりともなるであろう。

Roff の 7 因子中、親の態度に関係するのは最初の 4 因子である。第 1 因子は子供への関心の因子であり、関心過大(overconcern)——無関心(neglectful indifference)の両極をもつた連続であり、第 2 因子は民主的指導の因子、権威的(authoritarian)——民主的(democratic)。第 3 因子は許容性の因子、受働的許容性(passive permissiveness)——権威的厳格(authoritarian harshness)第 4 因子は親子間調和の因子である。

既述のように本研究の第 1 因子は Roff の第 2 因子に第 3 因子は第 3 因子に應ずるものとみられる。

本研究の第 4 因子は子供らしさ——大人らしさの奨励の因子である。Champney の概念的範疇には babying-adulting がありこれに應ずると思われるが Roff の因子にはそれに應ずるものは見出されていない。しかし Roff

の第 1 因子を高く負荷する項目の中には、子供の保護の仕方(babying-adulting)の項目があり、第 1 因子に近縁性があると思われる。Roff は第 1 因子が子供にたいする親の刺激というよりも、情緒的成分を多く含むといつており、またわれわれの第 4 因子にも愛情的項目が多く関係しており、相応するものと考えられる。

次に本研究の第 2 因子は同胞間の調和に関する因子であるが、FPBS にはそれに該当する質問項目がない。これは本研究においては特定の 1 人の子供に対する親の態度を資料としているのに対し、FPBS は家族内の子供一般に対する態度を求めるように設定されているためでもある。したがつて FPBS からは同胞間の関係に関する因子が取出されないと一応いふことができる。

ところが Roff には第 4 因子として親子関係の調和の因子が見出されている。これは同胞間調和とは異なるものではあるが、同胞を嫉妬する、兄弟けんかをするなどは結局は親の取扱いの不平等にもとづくと考えれば、ひとりの子供に対する不調和が、子供の他の子供に対する調和ある関係を失うこととなり、この 2 因子はまったく無関係とはいへない。

以上のように考えれば、本研究における 4 因子は Roff の 4 因子となんらかの程度において相応関係をもつといふことができ、これを表示すれば Table 3 のとおりである。

はじめに述べたように、質問項目や品等の方法は異なるとはいへ、等しく子供に対する親の態度を取り出すようとしていることが、これからうかがい知られるとともに、本研究の項目が一応の妥当性をもつことがいえると思われる。

本研究の第 1 因子がそのまま Roff の第 1 因子に一致

Table 3

本 研 究	Roff の研究
第 1 因子	第 2 因子
第 2	第 4
第 3	第 3
第 4	第 1

しないのはひとつの問題である。知能の因子のばあいのように、第 1 因子が G-factor に当たるか否かが、本研究のような態度因子についていえるかどうかは問題であり、また質問項目の立て方が

まったく異なるために、実際にどれだけ異なる因子であるかをあきらかにするわけにもいかない。

3) 本研究では第 1 因子と第 3、第 1 と第 4、第 2 と第 3 の各因子間に有意の逆相関がみられた。Roff の結果では、その 4 因子おのおのの間に、.34~.38 の相関があり、ことに第 2 と第 4 の間には .63 の相関があるといふ。これに應ずる本研究での第 1 と第 2 の間には有意

の相関は見出されていない。しかし各相関の方向は両研究において一致している。

したがって、

i) Roff のように、いずれかひとつの因子から他の因子を推定することはできない。われわれの研究では、Roff に比べて相互に独立性のより高い因子が取出されているのである。

ii) そのため、本研究では第1, 第3, 第4 因子より推定しえないこともないが、Roff のような親の子への“一般的良否”の態度を総括的に主張することは困難である。

iii) また前節で本研究の第2 因子と Roff の第4 因子とは意味的に類似することを暗示したが、因子の相関関係よりみれば、まったく別個の因子と考える方がよいといえる。

4) 本研究では子に対する親の直接的態度の因子のみを問題にしたが、その他の因子も子供の行動特性に関係することは FPBS の諸結果からも推察される。ことに親の人格特性、知的水準、あるいはその所属する社会経済階層も重要と考えられる。これらの要因は本研究で扱った態度の背景をなすものであるが、それに関する因子構造を知ること重要と思われる。

V 要 約

1) 親子関係の研究に当たっては、親の態度に関する有効かつ操作的に定義された質問または観察項目ならびに範疇を決定することが重要である。この目的のために80名の母親に対する態度〔Radke (1936) にならう〕57項目に関する面接質問より得た結果に因子分析を行なった。

2) 結果 (i) 第1, 権威的取扱; 第2, 同胞不調和; 第3, 許容性; 第4, 子供らしさの奨励; の4 因子が見出された。

(ii) 各因子間の相関係数 (r) は第1と第3因子 (-0.397), 第1と第4因子 (-0.372), 第2と第4因子 (-0.346) のみがそれぞれ有意な逆相関を示した。したがっていずれかひとつの因子から他のすべての因子の状況を推定することは不可能であり、また子供に対する親の一般的態度というものをいうことも困難である。

(iii) 上の各因子は FPBS による資料に対して因子分析を行なった Roff の結果と似ているところが多い。これは本研究の妥当性を示すものといえよう。

3) 子供の行動特性に影響する要因としては単に子供

に対する親の直接的態度のみならずその他の要因、たとえば親の人格特性、知的水準、社会経済階層なども考慮する必要があるように思われる。

附記 本研究に当たって浅田ミツ君をはじめ教室員諸君の多大の助力を得たことを感謝する。

文 献

- (1) Ausubel, D. P. et al. : perceived parent attitudes as determinants of children's ego structure. *Child. Developm.* 1954, 25, 173~183.
- (2) Baldwin, A. L. : Socialization and the parent-child relationship. *Child. Developm.*, 1948, 19, 122~136.
- (3) Baldwin, A. L. : The effect of home environment on nursery school behavior. *Child. Developm.* 1949, 20, 49~61.
- (4) Champney, H. : The measurement of parental behavior. *Child. Developm.*, 1941, 12, 133~166.
- (5) Itkin, W. : Some relationship between intra-family attitudes and pre-parental attitudes toward children. *J. genet. Psychol.*, 1952, 80, 221~152.
- (6) Lasko, J. K. : Parent behavior toward first and second children. *Genet. psychol. Monogr.*, 1945, 49, 97~137.
- (7) 中西・小西・谷 : 親子関係の心理学的研究. 大阪市立大学家政学部紀要, 児童学1, 1953, 183~223.
- (8) Porter, B. M. : Measurement of parental acceptance of children. *J. hom. Econ.*, 1954, 46, 176~182.
- (9) Radke, M. J. : *The relation of parental authority to children's behavior and attitudes*. Univ. of Minnesota Press, 1946.
- (10) Roff, M. : A factorial study of the Fels Parent Behavior Scales. *Child Developm.*, 1949, 20, 29~45.
- (11) Shaeffer, E. S. and Bell, R. Q. : Patterns of attitudes toward child rearing and the family. *J. abn. soc. Psychol.*, 1957, 54, 391~395.
- (12) Symonds, P. M. : *The Psychology of parent-child relationships*. Appleton - Century - Crofts Inc., 1939.

(1958年10月1日受稿)

Each check list consists of ten behavioral patterns and 30 to 40 situations.

(3) Subjects were parents who had primary school pupils or kindergarten children. Each subject was given a check list and asked to mark out resistant behaviors observed with their own children and infants.

(4) Typical patterns of resistant behavior can be grouped in the following order: I, temper tantrum type (crying and struggling); II, aggressive type (slapping, kicking and striking); III, vocal type (complaint and teasing); IV, mutistic type (keeping mouth shut).

(5) There are the high peak of 1:0 to 1:11 in type I, 3:0 to 3:11 in type II, 9:3 to 10:2 in type III, 11:3 to 12:2 in type IV, and the last type arises in adolescence. The resistance patterns in terms of age shift from motor resistance including type I and II to vocal resistance including type III and IV.

(6) Resistances of one year old children (1:0—1:11) are frequently observed in situations related fundamental physical training such as sleeping, cleanliness training, feeding, weaning, and locomotion (getting out of bed or children room, walking upstairs). Resistances of three years old children (3:0—3:11) increase in situations related to economic activity (asking to buy something or to get money), plays (spotting doors and walls with crayons or pencils, playing with dangerous tools such as knives, scissors, etc.), and household (helping at little household tasks). Resistances relating to choice of coats or dresses, helping at household tasks, drills of school works and choice of programs of radio or TV are all observed after five years old.

(7) The changing process of resistant situations depends on physical and social developments of children, expectancies of parents and unstable power relationships in family.

PSYCHOLOGICAL STUDY OF THE PARENT-CHILD RELATIONSHIP (8)

—A Factor-Analytic Study of Parental Attitudes—

by

Nakanishi, Noboru

Osaka City University

1) It is important for the research on parent-child relationship to determine the useful and operationally defined items of questionnaire or observation, and categories. Taking account into it, the data obtained from eighty mothers by interviewing, were factor-analysed on fifty seven items of parental attitudes (after Radke 1936; item number from 71 to 127).

2) Results; (i) Four factors i. e. authoritarian discipline, sibling disharmony, permissiveness, and babying were found.

(ii) The intercorrelations between each two factors were calculated. The correlation coefficient (r) between authoritarian factor and permissiveness were

— .397, authoritarian and babying — .372, and sibling disharmony and permissiveness — .346, and all were significant. So it does not necessarily follow that we can derive any one factor from the other and can say the "general good parental attitudes" (iii) The four factors were similar to those which Roff (1949) found on the FPBS by means of factor-analytic method. This suggests the validity of our results.

3) To predict the children's behavior characteristics, it seems that not only parental attitudes but the other factors, e. g. personality traits, intellectual level of parents and socioeconomic status to which they belong, are indispensable.